

「和名類聚抄」諸本の独自異文

——十巻本と二十巻本とを比較して——

不破 浩 子

平安時代（九三五年頃）源順が撰述した漢和辞書の『和名類聚抄』（以下『和名抄』と略称する）は、原本が現存せず、これを撰述当時の言語資料として活用するには、多くの手続きを必要とする。写本には大別して二十巻本と十巻本の二種類があり、前者には現存最古の写本（平安末期頃か）高山寺本（巻六く巻十の零本）や大東急記念文庫本、また、古い『和名抄』を正確に引用している図書寮本『類聚名義抄』（十二世紀初期写）などの発見により、『和名抄』の原型を探るための資料は豊富になってきている。

しかし、『和名抄』の定本としては、元和三（一六一七）年に那波道圓によって刊行された古活字版『倭名類聚鈔』や、江戸極末の考証学者・狩谷掖齋（一七七五く一八三五）が作成し、明治十六（一八八三）年に森立之等によって大蔵省印刷局から出版された『箋注倭名類聚抄』（以下『箋注』と略称する）が、重要な位置を占めている。特に掖齋は、那波道圓が行った、所引の典拠の当

代の伝本によって『和名抄』の本文の方を改めるという校訂方法に批判的で、写本の現状を尊重するという立場で、近代的な本文批判の先駆をなすものとして高く評価されている。しかし、これは掖齋が『和名抄』は多くの漢籍の今本より古い正統的な本文を伝えているという、『和名抄』自体の資料的価値の高さを正しく認識していたためで、伝文の正しさが中国の類書等によって裏付けられることを基準としているという点で、現在から見れば「本文の現状の正当性」^①の尊重において限界があることが指摘されている。

『箋注』には、「恐ラク源君ノ舊ニ非ザラン」「源君ノ見シ所ノ本く二作りシナラン」のような形で、『和名抄』の現状と漢籍等によって導き出されるあり得べき正しい本文との乖離を合理化しようとするところがあるが、これは源順の撰述した『和名抄』の「正しい原型」という考え方に基づいており、池田亀鑑氏が述べられた古典の文献批判の方法論^②の中の「古典は損傷されるものであり、書写は過誤を免れない」「作者の最初の自筆稿本が完全で正しいとは限らない」といった点の認識に不十分な面があることを示すものである。辞書がその時代に生きている時は、正確・忠実な書写よりも、むしろ実用目的に応じて必要な部分を抄写したり、新たな情報を補いながら増補・改変されていくもので、その辞書が生命力を持って有効に享受されている時ほど、大きく変化すると言

える。

『和名抄』に十巻本と二十巻本という大きく内容の異なる諸本が存在するのも、『和名抄』が成立してすぐに広く世の中に迎えられた、或いは『和名抄』は世の中の強い要請によって必然的に生み出された書であったという観点から、原本とは何かを考えてみる余地があるであろう。桧齋が本文を定めるに際して、文字レベルでの基準と方法を示したのが『校譌』と『異體字辨』である。³⁾

そこには、諸写本の多様な字形をいかなる字体と認定し、諸字体のうち、どれが原本のものであるかを判断し、どのような字形として定本に実現するかということが、考察・検討されている。桧齋は、この考証を踏まえ、訂本を作成している。概して、漢字一字の字体や万葉仮名の字種は、時代の影響を受けて変化しやすく、桧齋の訂本も源順当時の用字傾向を伝えることを意図したものであろう。それに対して、諸写本の独自異文が写本の系統と類別を反映することがある。宮沢俊雅氏は、桧齋が後世の増補改変が著しく、諸本中最下と判断した下總本に、古型を伝える側面があることを明らかにされたが、これは、下總本の独自異文に図書寮本『類聚抄名義抄』所引の『和名抄』と一致するものがあるということに基づいている。つまり、異文を大別すれば、古型を伝えるものと、後世の増補・改変に係るものがあり、原型に近づくには、明らかに古型であることが検証されている資料と照合することが

有効と言える。しかし、そうした古い資料に恵まれない場合は、後世の文献による増補であることが明白なものを除外する、諸本の異文を比較的に検討して個人レベルの過誤を明らかにする、といった方法をとることになる。辞書には、語注・音注・字体注記などを簡潔・有効に表現する定型的な形式や専門用語があるが、時代を隔てた書写者にその機能が理解されず、それが誤解や脱落を生む原因にもなる。また、写本の時代においては、書写の労力を省くために、出典名を略称で記したり、再出語を「――」という記号化したりすることがあり、それが次の書写者に正しく理解されないために異文を生ずることがある。

本稿では、桧齋が見ることのできなかった高山寺本、大東急記念文庫本（以下、東急本と略称する）等を活用することによって桧齋の異文処理の方法を対照化してみたいと思う。

諸本の異文には、十巻本・二十巻本の系統の別に関わるものと、各系統内における異同とがある。十巻本について見ると、孤立した異文と、諸本間で同一箇所⁴⁾の記述が異なるものがある。概して、曲直瀬本・下總本には後世の増補に関わる孤立異文が多く、昌平本は、他の諸本にも何らかの異同のある箇所、即ち十巻本系統の祖本に陥穽が存在したことを示すと見られる異文が多い。

○ 十巻本・二十巻本の系統の別に関わる異文

○ 十巻本内における異文

・諸本にわたる異同

・各本の孤立異文

『箋注』の考証は後者を中心としており、前者については後者に関連する範囲内での言及にとどまっている。これは、掖齋が、源順の撰述した『和名抄』の原型は十巻本であると判断し、十巻本を底本として採択したことの当然の帰結といえる。しかし、考証の順序としてこの小考では、まず前者のみを対象とし、その中から典型的な例を摘出し、それに解釈を加えることにする。

十巻本・二十巻本の系統の別に関わる異文として、次の五例をあげる。

なお、二十巻本の中でも高山寺本は、東急本・伊勢本・元和本とは異なる本文を有することが多いので、特に区別して「高山」と省記する。(一)内は、十巻本における巻・部類番号・部類内における順序を示す。なお、二十巻本諸本に異同のない時は、「二十」と省記する。引用に際し、「」で囲んだ部分は割注になっていることを示す。

(1) 十 櫓 唐韻云櫓〔音魯。内典云却敵樓櫓。夜久良。舟具作鱸〕城上守禦樓也(三・27—7)

高山 櫓 唐韻云櫓〔音魯。今案舟具之—宜作鱸。見舟具。—謂夜久良。涅槃經云却敵樓—等是也。〕城上守禦樓也

『和名類聚抄』諸本の独自異文

東急 櫓 唐韻云〔魯反〕今案舟櫓〔和名古之〕鱸見舟具

之讀〔夜久良〕城上守禦樓也

『唐韻』(唐・孫愐)を典拠とする正文部分は諸本とも一致しており、これは『廣韻』(北宋・陳彭年)の「櫓、城上守禦。・(上十姥)」にもほぼ合致する。諸本の割注は、次の要素から成り立っている。

- (a) 「櫓」の音注
- (b) 「櫓」の具体例
- (c) 和訓
- (d) 舟具の鱸

この中で、(a)は諸本「魯」という直音注で一致している。十巻本の「内典云却敵樓櫓」が正文の『唐韻』の「樓」の具体例であることは、高山寺本における「是也」という注記で一層明らかである。即ち、(b)は、「樓は、(城門の上に設けた防禦設備であるが)例えば『涅槃經』(内典)に見える却敵樓櫓がこれにあたる」という意味の注記である。

(c)の和訓については、東急本に「鱸見舟具之讀〔夜久良〕」とあるが、舟具ではないので「舟具ノ讀」とういのはおかしい。そこで、元和本は「讀」の下に「夜久良」を末尾に移して、その矛盾を解消しようとしているが、これは高山寺本に「—謂夜久良」とあることから、東急本は「櫓」の省略記号「—」を「之」という

漢字に読み誤ったものとわかる。先に述べた、省略記号を漢字と判断したために生じた異文の典型がこれである。また、東急本には「和名古之」とあるが、東急本は「櫓」字をすべて「櫓」に作っている。「櫓」は「甑」の異体字で厨膳具のコシキを指す。

したがって、これは「櫓」「櫓」の字体の類似による別語の訓の属入の可能性がある。よって、観智院本『類聚名義抄』（以下『名義抄』と呼ぶ）の「櫓」字に「コシキ」の訓があるのは、『名義抄』の依拠した『和名抄』にすでに「コシキ」の訓が存在していたことを示すものと考えられる。この場合「舟具作櫓」は異体字注記として位置づけられ、十巻本の本文はその立場である。ここで、高山寺本に「宜作」とあることに着目すると、「舟具の櫓は櫓に作るべきである」というのは「櫓」の語が舟具にも重出しており、「櫓」と言えば当時の常識としては舟具を思い浮かべることが前提となっているために加えられた注記と解することができるだろう。そして「古之」は、「呂之櫓」、見舟具（口の櫓は、舟具に見える）、「或いは「呂也（口也）」

といった注記から転じたもので、建造物の「櫓」は「ヤグラ」、舟具の「櫓」は「ロ」というように二義を別々の和語で区別していたと想像できる。

そう考えた時、十巻本の「舟具作櫓」はもともと単なる異体字注記ではなく、必然性のある注記であったことが明らかになって

くる。また、十巻本は、単に先行する写本を無反省に「写した」のではなく、文義の通りにくい部分を合理的に整理改変したものと考えられる。

(2) 十・高山 樓閣 四聲字苑云今謂臺上構屋為樓（弁色立成

云太賀度能）野王案閣（音各、今案謂朱雀門為重閣是）重門複道也

(三・27—8)

高山 樓 四聲字苑云今謂臺上構屋為——（弁色立成云太加

止乃）樓名

二十 樓 弁色立成云（太加止乃）一云（和名呂）

居處部前半の項目配列は、次のようになっている。（アラビア数字は部類内における順序を示す）

十巻・・ 4 殿	5 寢殿	6 堂	7 櫓	8 樓閣	9 觀	10 臺
11 廊	12 行宮	13 假床	14 房			
高山・・ 4 殿	5 寢殿	6 堂	7 院	8 樓	9 櫓	10 臺榭
12 房	13 坊	14 樓				
二十・・ 4 殿	5 寢殿	6 堂	7 院	8 樓	9 櫓	10 臺榭
12 房	13 坊	14 助鋪				

十巻本は「樓閣」という見出し語をあげ、「樓」の漢字に「四聲字苑」、「閣」の漢字に「野王案」を別箇に典拠として、前者の注

として『辨色立成』の「タカトノ」という和訓を、後者の注とし

て「朱雀門を重閣門という」ことを記している。正文の二つの典故は、いずれも、この直前の標出語である「櫓」と同じく城門の防衛設備の意味を持ち、日本でいうところの「樓」の意味とは異なっている。ここでいう「朱雀門」に関する注記は、日本側の実情に即した補足と考えられる。高山寺本は、「樓閣」の中でも日本で通用している「樓」に関する典故のみを残して、次に『辨色立成』の和訓をあげ、それに続いて具体的な樓の名を列挙している。さらに二十巻本では、意味が異なるために、日本人には不要である漢語としての「樓」の典故は削られ、『辨色立成』を正文として「ロ」という字音語を加えて、「ロ」の固有名を列挙している。

その結果として、二十巻本では、標出語の順序を変更し、「樓」を「殿」「堂」「院」等の宮廷建造物の次に位置づけ、各條に宮廷の建造物の固有名をあげ、宮廷に関する知識を提供する一方で、「櫓」は後方にまわされている。十巻本と二十巻本とは注記目的が変化しており、それに伴って配列にも変更が加えられていることを示す好例である。高山寺本は、その過渡的な性格を示している。

(3) 十 臺 爾雅注云臺（徒来反。宇天奈）積土為之所以觀

望遠也。尚書注云土高曰臺有樹曰樹（和名宇天

【和名類聚抄】諸本の独自異文

奈)

(三・27―10)

高山 臺樹 爾雅注云臺（徒来反。和名）積土為之所以觀

望遠也。尚書注云土高曰臺有樹曰樹（臺音徒

来反。音謝。和名字弓奈）

下總 臺 爾雅注云―（徒来切。和名字天奈）積土為之所以

觀望遠也。

二十 臺樹 尚書注云土高曰臺、屋有樹曰樹。上音徒来反、

下音謝。（和名字天奈）

「臺」は、本来高い基壇を意味し、戦国期の王の権威の象徴ともいべき壮大な建物を指す。高く土を盛り上げ高く建物を築くといった中国における歴史上の実情に基づいており、日本の風俗とは無縁の語である。したがって、それに当てられている和訓も「臺」に対する漢文訓読語、或いは、「たまのうてな」といった定型的な表現の中に用いられるのみで、その実態がどのようなものであるかは問題にしようがなかったと言える。下總本以外の十巻本は「爾雅注」と「尚書注」を典故として「ウテナ」という和語を重出している。

『和名抄』では、複数の典故や語に対する和訓が同じで、それが近接して現れる場合には「上同」「く下同」といった形で注するのが通例で、完全な語形を繰り返して掲げるのはこの條のみであり、ここには、何らかの特別な理由が存すると解釈すべきであろう。

おそらく、もとは、異なる部門に属していた二つの典拠を、それが重出している故に一つにまとめた、或いは写本によって典拠に詳略があり、詳しい注記内容を持つ異本によって補った、といういずれかの理由に基づくものであろう。

下總本では『爾雅注』のみ、二十巻本では『尚書注』のみが典拠としてあげられていることは、後者の考え方の傍証となるであろう。高山寺本で、『爾雅注』に対する割注に「和名」という冠称のみがあつて、他本に存する「宇天奈」という和訓が欠けているのは、高山寺本の書写者が、訓の重出を整理しようとしたためと推測される。更に、写本による典拠の異同の要因として、原本に数多い典拠があげられていたとしても日本にそのものが存在しない場合、同定すべき適当な語がないために記述が大幅に省略されていった、という状況が想定できる。また、原本には、仏具などの項目にも「臺」が標出されていたが、改編を重ねていくうちに重出する項目が統合されていったために、このような形態になったという解釈もできる。

(4) 十・高山 亭 釋名云亭〔音停、弁色立成云客亭、阿波良夜。亭子遊息處小屋也〕人所停集也

前田 亭 釋名云―〔音停、弁色立成云客―、阿波良夜。遊
(三・27―20)

子息処小屋也〕人所停集也

下總 亭 釈名云―〔音停、辨色立成云客亭、和名阿波良

夜。子者遊息之處小屋也〕人所停集也〔和名一云末良比度夜〕

二十 亭 釋名云亭、人所停集也〔和名、阿波良〕一云〔阿

波良夜〕

諸本とも、正文の『釋名』の引用は一致しているが、割注部分に異同が多い。例えば、前田本（伊勢本、曲直瀬本も同じ）は、「遊子息處小屋也」に作っている。これは「亭子遊息・」の「子」字を「遊子（タビビト）」と解したために、割注全体を「客亭」の一語の注と見て、「客亭は、アバラ、遊子の休む處の小屋である」と注したと推測される。高山寺本は「―子者、遊息處小屋也」とし、下總本の「子者、遊息之處小屋也」は、「亭」字の省略記号である「―」を脱したもので、この割注は「客亭＝アバラ」「亭子＝遊息する處の小屋」という二種類からなる。

「客亭」をアバラと訓ずる事は、現存最古（九世紀極末成立）の漢和辞書である『新撰字鏡』に「客亭、无壁之屋也。客人屋。阿波良（天治本・一二）と見え、康平元（一〇五八）年「東大寺修理所修理記」にも、連子を有する廳屋を「阿波良」「阿亭廳屋」「亭廳屋」と記していることで証明できる。東急本の「一云」は、宮沢俊雅氏によれば、十巻本の典拠の省記⁽⁶⁾ということであるが、こ

の「一云阿波良也」は、十巻本の「弁色立成云客亭、阿波良夜」に対応している。すると、「和名阿波良」は、「亭子（『遊息處小屋』に対する和訓であつた可能性も強い。また、下總本の「未良比度夜」の訓は、「新撰字鏡」の「客亭」の注「客人屋」に適合し、「客居（『今昔物語』）」「まらうとゐ（『枕冊子』三一五、『源氏物語』早蕨）」等の用例がある事から見ても、時代的には不合理でないことは、校齋が指摘する通りである。

(5) 十・高山 家〔附第宅〕 四聲字苑云家〔音嘉、和名與宅

同〕人所居處。漢書音義云宅有

甲乙次第、故日第宅

(三・27—22)

二十 家〔附第宅〕 四聲字苑云家嘉反〔和名伊閉〕人所

居也。一云宅〔降訓上同〕有甲乙次

第、故日第宅也

和訓について、「和名伊閉」のある二十巻本と、十巻本とに大別できる。「和名与宅同」「訓上同」とともに「宅」が「家」と同じ和語にあたることを示す注記である。旧本（『箋注』の底本である京本系の本）・曲直瀬本において「和名」の冠称が無いのは旧本系の諸本が「和名」という冠称を省記する性格を持つたためであり、二十巻本の「降」字は「澤」「擇」といった字を誤読したもので、本

来は「宅」の音注ではないかと想像される。

本條は、寺社・官庁・宮殿といった公的建造物ではなく、私的な住宅、就中貴族の邸宅を表している。しかし、特に貴族の甲邸（大邸宅）を表すべき和語が無いので「家と同訓」としておかざるを得ない、というのが「和名與宅同」という注の趣旨と考えられる。「イヘ」は、上代においては純粹に住宅建造物を表す語ではなく、家族を含めた抽象的なスマヒという概念を指すので、ここに「イヘ」の訓を当てるのは上代語の語義には合わないが、「宅」字について、「く同」という注記があることから、原本では「家」字の方に具体的な和訓が掲出されていたことは明白である。

以上、高山寺本、東急本を視野に入れて、十巻本と二十巻本の系統の別に関わる異文のうち五項を摘出して検討を加えてみた。その結果、写本により、多くの異文が存在するが、その異文は、単に漢字の類似（省略記号を文字に見誤る）によるという単純なものも存在しないとは言えないが、大多数は、書写者の何らかの典拠に基づく意図的な改変であると判断できる。その意図を探ることにより、それは、単に辞書発達史上の問題のみならず、文化史にも拡大する問題解明のヒントを内蔵していると言える。十巻本の原型を考える上でも、二十巻本の本文を考慮に入れることの重要性が明らかになったと考える。

校齋がこれらの異文をいかに解釈し、取捨選択して、『和名抄』

成立期の「原本」を再構成しようとしたかという問題については、更に詳細に十巻本内の異文の検討が必要であるが、それについては、別の機会に述べることにしたい。

注

- (1) 梅谷文夫「椋齋雜記、其二」(『国語と国文学』1982)
- (2) 池田亀鑑「古典の批判的処置に関する研究」1941
- (3) 拙稿「『和名類聚抄』の訂本について―異体字をめぐって―」1982
- (4) 宮沢俊雅『倭名類聚抄・天文本』(東京大学国語研究資料叢書)1987
- (5) 蔵中進「『和名類聚抄』の語彙と配列」(『谷山茂教授退職記念国語国文学論集』1972)
- (6) 宮沢俊雅「『和名類聚抄』の和訓について」続貂(『築島裕博士還暦記念論文集』)
- (7) 木村徳国『古代建築のイメージ』1979

小稿は、遠藤邦基先生、松尾良樹先生の御指導による研究会の成果をもとにして改稿したものであります。遠藤邦基先生には、成稿に至るまで御助力を賜りました。記して御礼申し上げます。

十九九三・四・二〇